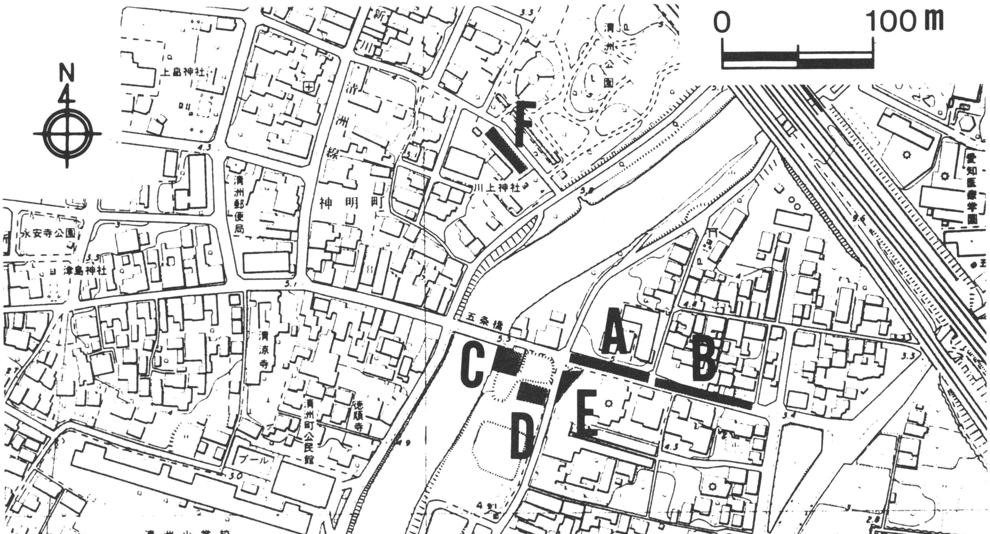
清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）

調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南流する五条川中流域に形成された自然堤防とその後背湿地に立地する古代から近世にかけての複合遺跡であり、行政的には西春日井郡清洲町に所在する。発掘調査は昭和59年から継続されており、今年度は県道新川清洲線拡幅に伴う調査1010㎡（A・B区）と五条川改修に伴う調査900㎡（C・D・E・F区）実施した。

調査の概要

五条川左岸のA～E区のうちB区は自然堤防と後背湿地の変換点に、その他は自然堤防上に立地し、標高は約3.6ｍ～５ｍである。F区は五条川右岸の後背湿地上に立地し、標高は約3.5ｍである。基本層序はB区で、表土、にぶい黄褐色シルト層、褐色シルト層、黄褐色粘質シルト層、黄灰色砂層である。調査の結果、A・B区では古代、城下町期、宿場町期の遺構が検出された。調査区が長狭なため遺構の正確なプランは把握できなかったが、奈良時代の一括遺物が出土した住居跡（B区SB01）や城下町前期の良好な一括遺物が出土した土坑（B区SK39）は注目すべき遺構である。またC・D・E・F区でも城下町期、宿場町期の遺構が検出されたが、特にF区では『清須古城絵図』に記載された清須城の内堀が確認され、金箔瓦や人名が刻書された瓦を含む多量の瓦が出土した。その他C・D区では宿場町期の礎石群や井戸の位置から美濃街道沿いの景観の一部を垣間見ることができた。　（大竹正吾）



第１図　遺跡位置図

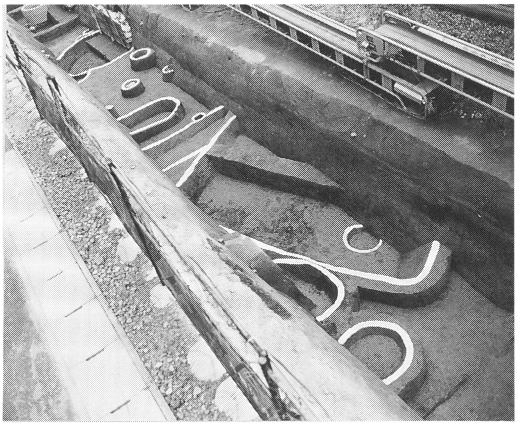
県道新川清洲線関連（A・B区）

A・B区は県道拡幅にともない昨年度と今年度で片側ずつ調査を実施した。調査区は幅5ｍ前後であったが、奈良時代から江戸時代かけての多くの遺構を検出することができた。ここでは紙面の関係でB区で検出されたSK39とSB01について触れることにする。

SK39は調査区の狭さに加え江戸期の土坑にきられているため正確な平面プランは確認し得なかったが、深さは110㎝を測る。その埋土は多量の焼土、壁土、炭を含み、火災による焼失家屋の廃材を投棄した土坑であると考えられる。出土遺物（第3・4図）は1・2が天目茶椀。3は李朝の粉青沙器刷毛目茶椀で本遺跡では初例である。4・5・6は緑釉小皿で5・6は内面に朱の痕跡が残る。7～16は土師皿で底部に回転糸切痕を残す。17は灰釉の卸し皿で片口を有する。18は李朝の雑釉徳利。19は緑釉の鉢で胎土は灰白色を呈し窖窯の製品と思われる。20・21は擂鉢。22は内耳鍋。23は香炉。24は鉄釉の蓋。25は小型の灯明具。26・27・28は建水などの茶道具と思われ、26は波状口縁を有する。29は鉄釉四耳壺（茶壺）。30は常滑の甕で体部に鳥と草を線刻しており、N字状折返し口縁が頸部に融着する形状を示す。これらの遺物は大窯Ⅰ期を主体とする良好な一括資料であり、喫茶具が多く、輸入陶器を含む出土遺物の質の高さはこの地に暮らした人の豊かな生活を想像させる。

SB01は一辺が364㎝、深さ31㎝の竪穴住居で、北西隅に柱穴が確認された。出土遺物はすべて須恵器であり、その器形から猿投窯編年における鳴海32号窯式に属するものと思われる。なおこの時期の遺構は過去の調査結果をみても現五条川沿いの自然堤防上にはなく後背湿地との変換点付近に分布することがわかる。今回の調査でもSB01以西（五条川沿い）に古代の遺構は存在しなかった。

B区全景

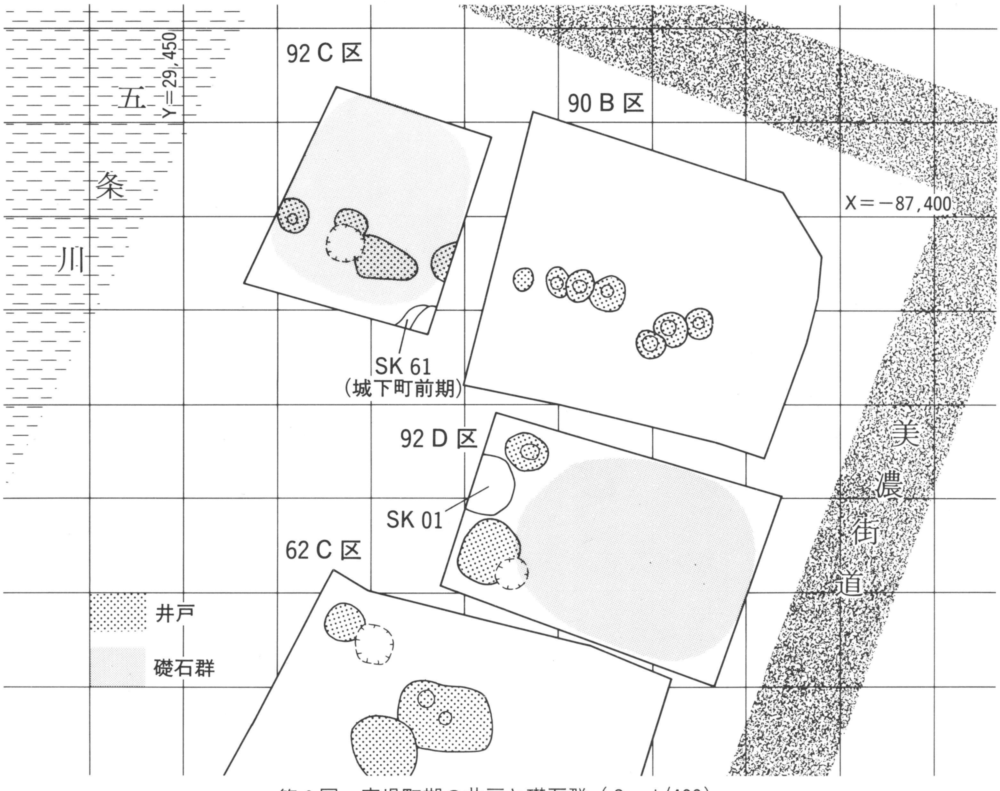


B区　SB01

五条川河川改修関連（C・D・E・F区）

C区　C区は現五条川の東に隣接する。上面で検出された遺構は宿場町期、城下町前期に大別される。宿場町期の遺構としては江戸時代後期の礎石群、井戸、土坑が検出された。江戸（ＳＥ04）は最下層に縦板の桶組を２段、その上に常滑産陶製井筒（甕の転用ではなく井戸専用に焼成したもの）を３段積み重ねている。城下町前期の遺構は土坑のみであるが、ＳＫ61からは大窯Ｉ期の良好な一括資料の出土をみた。下面では旧五条川の河川敷が確認されたが、川の埋土から「法故精勤給侍合無所乏尒時世尊欲□宣」(『妙法蓮華経巻第五』の一部)、「□佛南無阿弥陀佛」、「南無阿弥陀佛南□」「□菩提」と記された柿経、卒塔婆、漆椀、漆皿、下駄などの木製品や土師皿が出土した。また木杭列が東西、南北にわたって確認され、川に張り出した桟橋のような施設が想定されるが、詳細については不明の点が多く、過去の調査結果(90Ｂ、Ｃ、Ｄ区のＮＲ01)をふくめて今後の検討課題となろう。

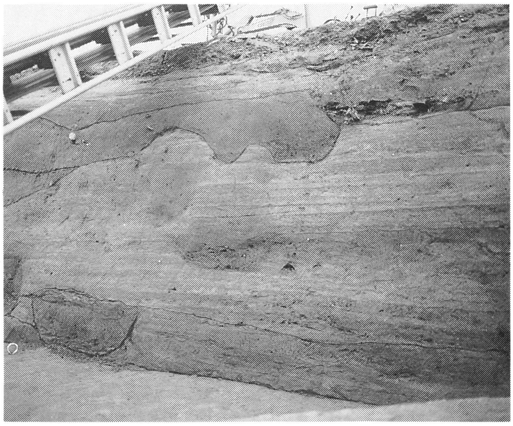
D区　Ｄ区は美濃街道の西に隣接する。上面ではＣ区と同様に宿場町期、城下町前期の遺構が検出された。宿場町期の遺構としては礎石群、井戸、土坑が確認されたが、とりわけＳＫ01からは江戸時代前期の良好な一括資料を得ることができた。またＣ・Ｄ区ともに礎石群と井戸の位置から、美濃街道に面した建物とその裏手に掘られた井戸という宿場町期の景観が想定される。



第２図　宿場町期の井戸と礎石群（S＝1/400）

Ｅ区　Ｄ区の東、美濃街道をはさんで位置するこの調査区で注目すべきは、標高約３ｍから4.6ｍにかけてみられるシルトと砂の互層である。層の形成は洪水に起因するものと考えられ、その形成過程において幾度か安定した時期があったことがセクションから観察できた。検出された遺構の多くはこの層の形成過程で掘削されたものであり、それらはすべて城下町期に掘削された遺構である。なおＡ・Ｄ区でも同様の堆積が認められることから、城下町期のある期間、この地が非常に不安定な状態にあったことがわかり、江戸期の瀬替え以前、民衆を苦しめた五条川の姿を彷彿とさせる。

Ｆ区　五条川右岸の本調査区からは、清須城の内堀が検出された。上層を明治時代以降の用水路と水田によって攪乱されており、調査区全体が堀の中に入っているため、平面プランや深さなど正確なことは確認し得なかったが、調査区内で残存する堀の深さは最深部で80㎝あり、西から東に向かって（五条川に向かって）深くなっている。堀の埋土は上層が黒色粘土であり、下層は黒色粘土に砂が混じる。遺物は瓦が中心で、城下町前期の陶器、土師皿も出土している。瓦については軒丸瓦28点（巴文19点、桐文２点、不明７点)、軒平瓦６点（均整唐草文２点、不明４点)、鯱瓦１点、熨斗瓦４点、切隅瓦１点が出土し、軒丸瓦のうち１点は金箔瓦である。なお丸瓦のなかには凸面に「助二□」「孫ヵ介」「二郎四郎」「藤右衛門尉」と刻書されたものがあり注目される。遺物の出土状況で興味深いのは、ほとんどの瓦の出土レベルが黒色粘土層の上層～中層部に限られ、堀の下層部からの出土が少ないことである。このことは堀がある程度埋まった時期に城またはそれに付属する建造物が廃絶したことを示唆しているのではなかろうか。また軒丸瓦と軒平瓦の出土数のアンバランスは瓦の葺き方、廃棄のあり方を含めて今後の検討課題となろう。



Ｅ区洪水性堆積

Ｆ区出土軒丸瓦（左が金箔瓦）

まとめ

今回の調査を過年度の成果も考慮してまとめると次の６点になる。

１．五条川左岸では古代の遺構は自然堤防上になく、ＳＢ01が検出されたＢ区以東の自然堤防と後背湿地の変換点を中心に展開すると思われる。

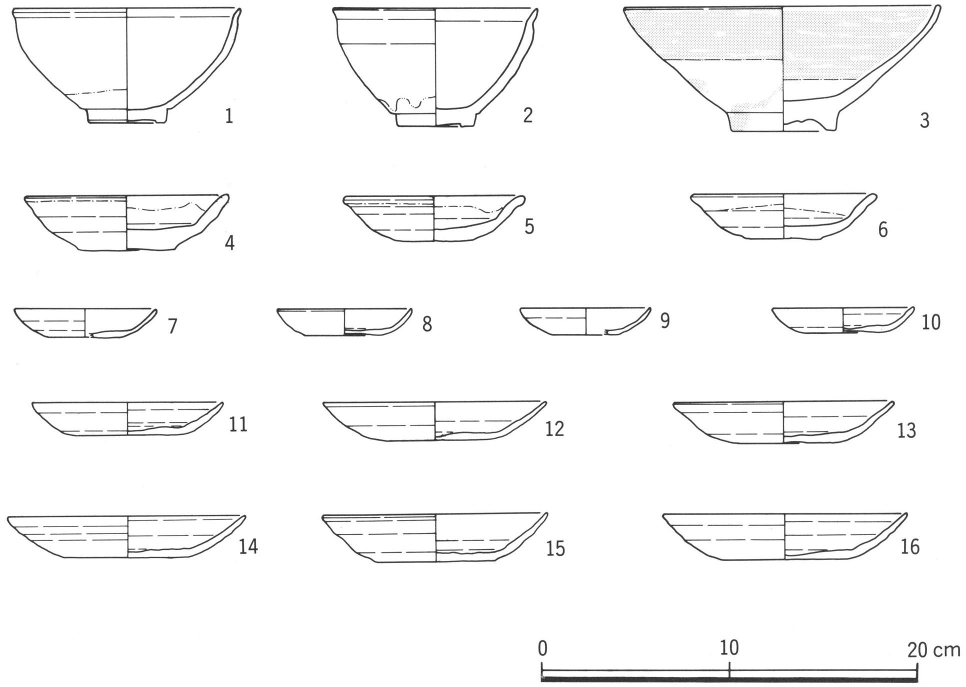
２．五条川左岸のＡ・Ｂ区では古代の包含層と城下町期の包含層のあいだに中世の遺物をわずかに含む約70cmの黄褐色粘質シルト層が確認されたが、中世の遺構は検出し得なかった。中世においては遺跡の中心は後背湿地上にあったと考えられる。

３．Ｂ区のＳＫ39、Ｃ区のＳＫ61から大窯Ｉ期を主体とする良好な一括資料が出土した。これらの遺構の掘り込み面の標高は約3.8～4.0ｍであることから、この地域では江戸期と城下町前期の生活面の標高に大きな差がみられないことがわかった。

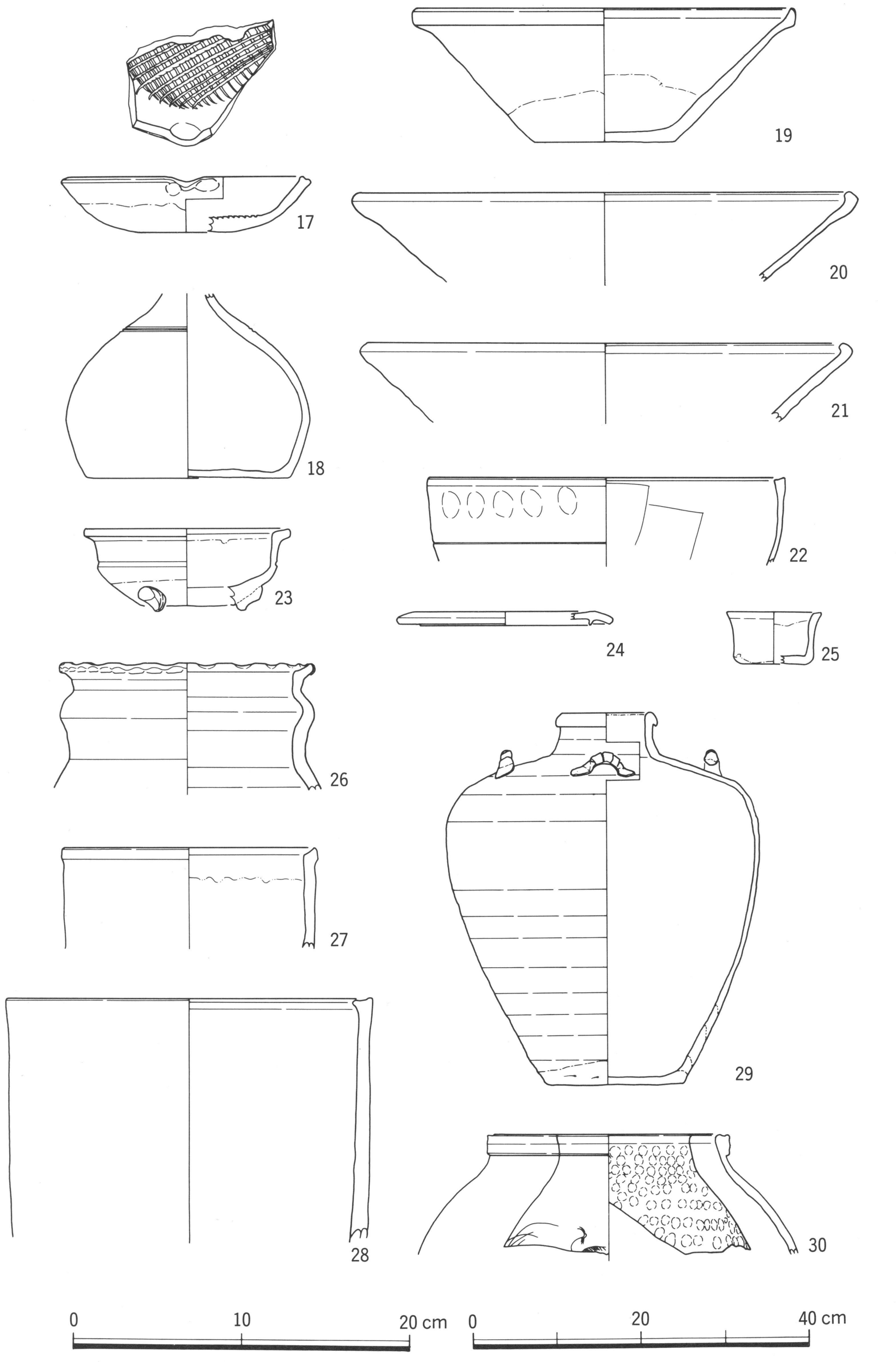
４．Ｃ区の下面では旧五条川の河川敷が確認され、その埋土から城下町前期遺物とともに柿経、卒塔婆、漆椀、下駄などの木製品が出土した。上面で検出されたＳＫ61が大窯Ｉ期に所属することから、河川敷は前期のなかでも大窯Ｉ期までに埋まったことになる。

５．Ｅ区では1.6ｍに及ぶ城下町期の洪水性堆積が確認された。

６．五条川右岸のＦ区では、『春日井郡清洲村古城絵図』に記載された清須城の内堀が検出された。金箔を施した軒丸瓦や人名を刻書した丸瓦など貴重な資料を得るとともに、本丸付近においてはじめて城下町前期の遺物群の出土をみた。　(蟹江吉弘)



第３図　Ｂ区ＳＫ39出土遺物　１：４



第４図　Ｂ区ＳＫ39出土遺物　（17～28　１：４，29・30　１：８）